

繪本
田村物語

六

遠
979
64



門通
雜 977
卷 6

復讐 田村物語 卷之五 下卷

武關

川上 鯉老 人編輯

下流 梅梢軒關旭訂正

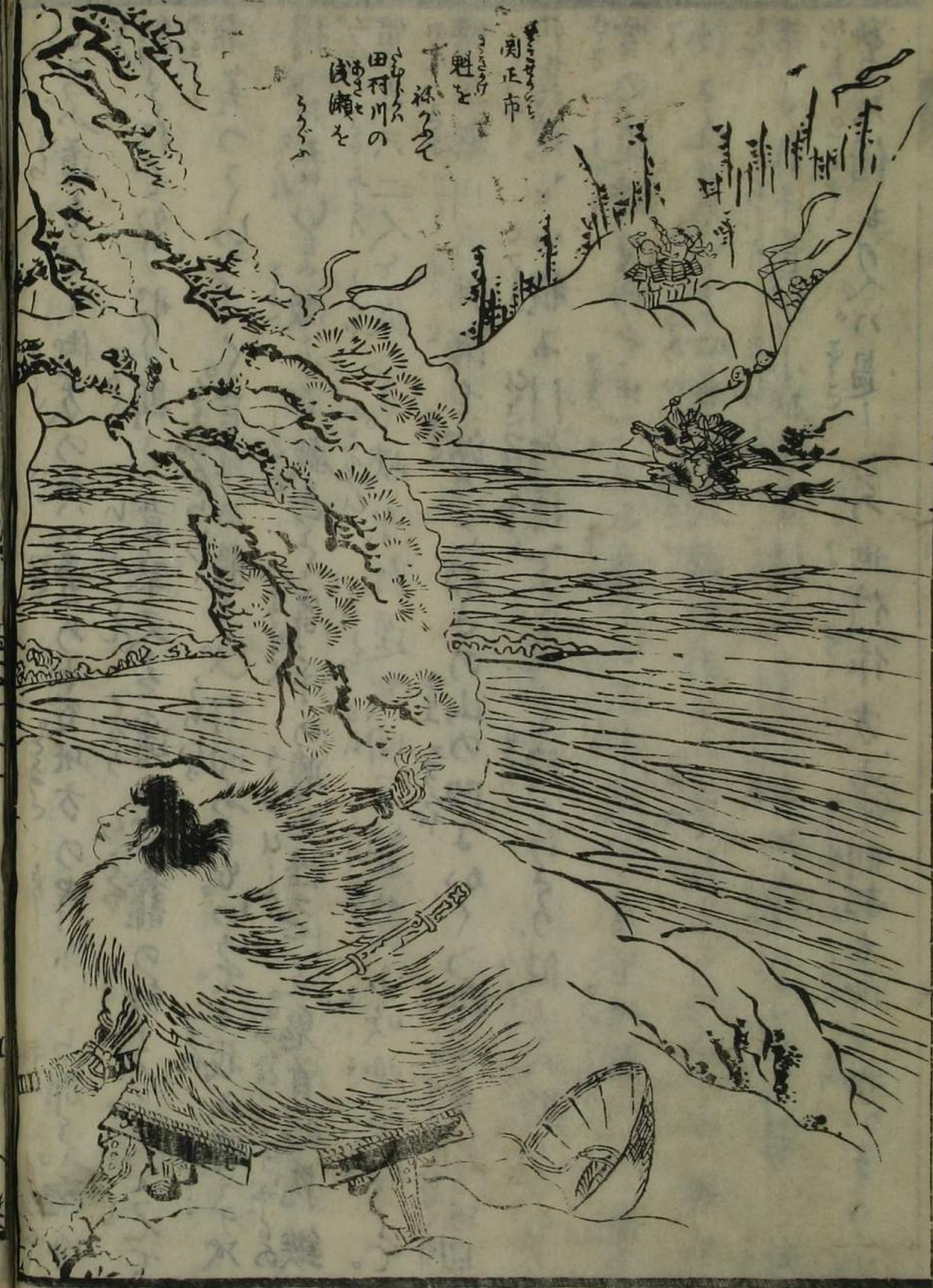
第十回 忠孝の餘慶



去程 田村磨もころ修勇もせまひ。氣しく出立。旌旗空に覆
人強く。馬盛ふ。既而赴く時節。小至りて。清水の觀世音の佛前
み詣り。ぬくも。么。念。用。運。祈。了。鈴。鹿。は。は。して。う。ら。む。ら。ひ
ま。ん。も。く。て。名。や。あ。る。園。の。戸。を。て。連。坂。の。山。に。越。え。浦。波。の。栗
津の森やかげろふの。石山寺に伏拜。是も清水の一仏と頼る
あふ。近江路。瀬田の長橋踏まじ。駒も足がみや勇ひん
そて。伊勢路の山。近くなれ。修。あ。ち。り。雪の降。あ。あ。寒さ

又打忘し時をね花の面白やと猛とこく流るわく土
 も木も我大王の神國ふ元より親音の御誓ひ佛力としし神
 力もさる教くに健男がまらふ久し親の讎今そ報ん耐ありと
 惣軍銳氣盛んしして終不鈴麻山の麓なれ鈴麻川あそ著お
 ちり見波せむ川の流屈曲して巖岨たり山又山皆白妙ふる
 めも寒く水又あ碧潭のま物凄しくして崩岸の小笹も
 雪小臥く赴れをなせりさ白積る千歳の古松と山を繞る
 蟠龍の形と椽銀と束し百尺の奇石と巖お横る猛虎れ
 嘯ふ似しり飛泉の御音の岩根砕れ鵝毛の飛て梢を拂ふ
 野雀樹の洞は隠し棲声遠近お啼く其ありこは寂く寥く
 として神代の往昔のささるに空飛るれ通路あふて歩ぬ

ところ道もな御方の兵の勇めども此方の岸おらら郡々
 然るれむかりなり斯く韋駄天と遙み石龕の裡より足とて
 嘲笑つるしく官軍お幾とび打向ふもいそ我お勝るや
 得べれ吾れは微しく戯とて寄手の膽を挫とて鬼首眼銃鏃
 軍太只二人を従へて峽なれ還り回て簑笠小吹雪を侵して
 暗不谿川の流瀨を涉りこねこの山の凹まかくらひて
 の鳥銃を小眼お引付後とらうと待たけり彼方ハ斯もも
 雪の道踏まけて先にお進し正市のいうも此谿川を一番お
 赤さんりたると心勇に浅瀬やあると尋ねると思儀や
 帯るれ千鳥の小柄まじも清らうみ三声お發バこら不審と公
 尋ねれ借おりハ過らとて世代作方あて刑部太郎が物がきり小



田村川の
浅瀬を
渡る

正市

日本外紀卷之五

危きに臨んで声なき發して小鳥の小柄に不思議ありとありて
 去るに若くは彼が乙女を殺し去るに折つて落せしりの飲何れもせよ
 心得がたれ有る女と吃と振向らばおれ鳥銃の響きを
 山が動けし正市が胸先を斜に拂つて玉の道も過りて
 忽胸のつらりの血も流る軍終りて後おえれば日頃信を觀世
 音の隠家半破りて正市は大悲の擁護なりとれ少や
 正市の浅手の疵をこそもせとすのこころなれ奴らと鳥銃の
 煙りを暮めて追て行韋駄天と件の玉を打損じ鬼首鏝を
 存し備へ山の頭も顯し出嶺小音大音のげて汝もはや
 駄天刑部を爰おあり優しくも田村が討手に向ひてはよる田村
 が父の苜田磨も我照門お討を授けぬ泉下の鬼とるはね

今照門も隱形鬼毒丸と名乗負純高貫おも霹靂毘天魔
 八藏と名を改め我とひとしく此山に住われ敵とありて田村を出
 せ汝も名もなれ下郎なりとや此場を逃去りて可惜命を助る
 べと傍若無人の大言も正市能く入るわれの間違ふに刑部
 かねば汝もどく過言を止我言とてを射せよ往る比筆捨山
 の山中も我妹乙女をありて闖殺し殺せし外人おありぬ
 証拠も千鳥の此小柄危きも臨んで音を出せしはいつか之の
 ありべしと無念の眼お詰りては韋駄天嘲り微笑く叔を
 その時我手おかけ女こそ汝も妹ありありけり飲たむと妹
 汝もあつて汝もともぐ地獄の住居とてとと篋笠と
 お尻捨しとておそりや黒髪をうぬ紅のおどりの髪と振

乱し腰ぬら虎豹の皮を纏ひ眼の光り人と射れ弓も馬も
も一枚の鬼も人もかざら二人を従へま向ふと田村磨この
洞谷沢女もひて扱こそ隠形鬼毒丸とつけられ弓木甲斐さ
照門なるぞ當の敵の韋駄天毒丸彼ホ二人と討取を自餘の
奴等とるふ足がれ鬼畜なり如何ふ義人の非をばや止市討
まな續けや回ると採幣取と一度扱けを石井義人を始し
て大勢一度おどろとおひて餘を洩さる討とれと追落擁
を韋駄天怒つくとつとと睨持とれ筒をかまがり捨大太刀扱
と拜と討當れを幸ひ難拂へば強力勇氣のまは肉よはし
めと争りし寄手の勢も右と左へ切立られむらむらと崩れ
とこの所は是よ氣をぬく鬼首眼義鐵軍太走りかつて正市が

引手と馬手に組けくところ公得とると刃を燃つくと三尺
一寸氷の又電光縮妻閃とととえへが鐵が首と失てんぢを
是よ驚れ鬼首眼義鐵軍と後のおどろの髪がゆへんと獲
て中よ拏げかみ任せとるひやと投とば傾倒とさせて向ひ
の谿川にんぬと水おらら込と形をてんへさなりあちり。これこそ
怒るる韋駄天が四角八方ら拂ふお巖の上より毒丸を御方
を討せと出合とと先くけてと出れよ續く悪鬼の霹靂段平
天魔八義鉄槍一その外魔軍ハ勇とまし得物々々を拏手つと包し
頭ハ一やうお火焰とそゆる赤頭の向ふ吹雪ふ吹久し。烈火を
かくやと押おして追つ返つ入乱と。こつ先途と戦つと。この村
田村磨と味方成勵し。この甲斐なれ者ともよ。譬言韋駄天毒丸

か空へ飛行の術ありとも。王位に宿く天罰とらひ父の讐。今こそ
 おりし知るよしと。手早く鏑矢拔出し。さうりくくと引抜つて兵を
 放つ矢誤つと。おこふ向へれ毒丸が睨し左の眼より。襟首ぐさごと
 羽ゆくし責と貫けを。何うか以てなまうべた。虚空とけくむ若こ
 今ぞ叫喚阿鼻焦熱流る。血は海に瀧津瀬の岩根小控
 と倒れ処死人けり。と花かす。押へて首に討落し。大音
 わげく。隱形鬼毒丸。實と弓木甲斐守照明を。今日只今坂上
 田村鷹一箭の討取めふと。落なりと。父も勇めれ御方れ兵士
 とらまら鎧小件の首に突貫死す。此方に拒へしあり。橋の地
 よくこそ入へよ。是とひるも御狩のとら。老狐の怨この今
 めり。回し返ぬとや。知しと。是れふ氣を得く。官軍を。鯨波と

遣つて押さめれ。正市飛人生先。勇次振つて。韋駄天を。建し
 へせと。取詰る。魔軍ハ前後不度を失ひ。爰に死失彼知し。倒れ
 らと。山崩し。されを。韋駄天の。制とれども。乱とる。の
 うれ鳥合の兵。鬼畜の。浅狭さ。跡をも。入して。逃ぬ
 小ぞ。はりの。韋駄天。人の。危く。入る。忽ち。巖
 石。登り。天。向。く。咒。咀。して。曰。

引 引 飛 勢 走 走 走 走 走 走
 逆 流 黒 雲 亡 失 禽 鱗 如意
 死 走 走 走 走 走 走 走 走 走 走
 逆 流 黒 雲 亡 失 禽 鱗 如意

と唱ふる声も物冷しく。不思議や吹雪の空智く。黒雲四方に打

擁^とミ霹^ひ靨^{せき}稲^{いな}妻^{つま}閃^{ひら}れ^はい^はり^り梢^{しほ}く^く吹^ふ折^お嵐^あ小^こ降^ふる^る鉄^{てつ}火^かの^の焰^{えん}の
 勢^{せい}ひ^ひ焦^{せう}炎^{えん}地^ち獄^{ごく}も^も斯^すや^やん^んと^と寄^よ手^ての^の面^{めん}み^み乱^{らん}ま^まか^かれ^れば^ばろ^ろ痛^{いた}い
 猛^{まう}小^こと^とや^やれ^れども^{ども}鉄^{てつ}火^かの^の青^{せい}火^か堪^{かん}ら^らぬ^ぬ。湛^{たん}の^のう^うら^らに^に韋^い駄^だ天^{てん}の^の跡^{あと}く^くら
 ま^まし^して^て谿^{せき}川^{がわ}を^を越^こえ^え石^い籠^{かご}に^に取^とり^りな^なれ^れが^が須^す更^{えい}に^に雲^{くも}と^とう^うら^ら晴^はれ^れく。
 雲^{くも}と^と止^とめ^め千^{せん}丈^{ぢょう}の^の巖^{いわ}も^も松^{まつ}も^もち^ちや^やく^く。飛^と泉^{せん}の^の響^{ひび}ぞ^ぞり^りの^のと^とど^どれ。
 斯^すて^て田^{でん}村^{むら}磨^らと^と齒^こ嚙^がみ^みは^はし^して^てま^まと^とま^まへ^へども^{ども}詮^{せん}方^{かた}な^なく^く。こ^これ^れの^の
 陣^{ぢん}屋^やに^に戻^もり^り拾^{しよ}ふ^ふ。旦^{たん}日^{じつ}を^を西^{せい}に^に沈^{しん}む^むろ^ろな^なれ^れば^ばお^おや^やお^おそ^そ鬼^{おに}
 の^の三^{さん}四^し二^にの^の空^{そら}高^{たか}く^く飛^と渡^{わた}る^るも^も憐^{れん}れ^れと^とあ^あら^らく^く。は^はら^らと^とて^てま^ま旅^{りょ}の^の夕^{ゆふ}へ
 れ^れ脚^{あし}心^{こころ}鬱^{ふさ}と^と樂^{たの}み^みと^とま^まら^らぬ^ぬ。既^{すで}に^に毒^{どく}丸^{がん}が^が首^{くび}に^に得^えれ^れども^{ども}。い^いら
 う^う鬼^{おに}神^{かみ}を^をう^うら^らち^ち亡^なし^して^て天^{てん}皇^{こう}の^の宸^{しん}襟^{えん}に^に休^{やす}め^めな^なり^り。且^{かつ}に^に又^{また}韋^い駄^だ天^{てん}
 が^が頭^{かぶ}に^に得^えて^て毒^{どく}丸^{がん}が^が首^{くび}に^に一^{いつ}同^{どう}に^に考^{こう}の^の尊^{そん}君^{くん}を^をも^もす^すじ^じめ^めと^とあ^あら^らせ^せん

と^との^のお^おり^りひ^ひま^まく^くども^{ども}。妖^{まじ}術^{じゆつ}に^に以^もつ^つて^て牙^{こゝろ}を^を道^{みち}ら^らし^しに^に。足^{あし}を^を破^{やぶ}ら^らん^ん討^う
 畧^{りやく}ら^らも^も面^{めん}を^をい^いら^らぬ^ぬと^と同^{どう}ま^まの^のあ^あら^ら。その^{その}時^{とき}正^{せい}市^し進^{しん}と^と出^で。今^{いま}日^{にち}れ^れ残^{のこ}り^り
 お^おあ^あり^りや^や韋^い駄^だ天^{てん}に^に討^う取^とる^るに^に。妖^{まじ}術^{じゆつ}の^のあ^あら^らみ^み晦^{くろ}ま^まれ^れぬ^ぬ
 こ^こも^も返^{かえ}ら^らぬ^ぬも^も口^{くち}惜^{おし}け^けと^と。鬼^{おに}ふ^ふ角^{かく}向^{むか}ひ^ひの^の谿^{せき}川^{がわ}を^をう^うら^ら流^{なが}り^りて^て。
 足^{あし}非^ひに^に鬼^{おに}が^が城^{じやう}を^を踏^ふ破^{やぶ}り^り。勝^{しょう}負^ふは^は一^{いつ}時^{とき}に^に交^まさ^さす^す。拳^{こぶし}を^を握^{あつか}
 り^り。齒^{こゝろ}嚙^がを^をま^まし^して^てぞ^ぞ扱^あへ^へ。か^かれ^れ所^{ところ}に^に死^しん^ん人^{ひと}に^に忙^{いそ}じ^じく^く御^ご前^{ぜん}
 お^お出^でる^る。此^{こゝ}山^{やま}の^の魁^{せう}首^{くわい}韋^い駄^だ天^{てん}が^が妖^{まじ}術^{じゆつ}に^に破^{やぶ}ら^らん^んと^との^の御^ご事^{こと}な^なら^らば^ば。
 我^{われ}一^{いつ}の^の法^{ほう}あり^りて^て。四^し海^{かい}万^{まん}民^{みん}の^の為^{ため}に^に。一^{いつ}臂^{うで}の^の力^{ちから}に^に添^たん^んと^と
 こ^こそ^そや^やと^とあ^あら^らぬ^ぬ。如^{ごと}く^く呼^よび^ひ入^いり^りて^て對^{たい}面^{めん}に^に。な^なま^まひ^ひ。み^みの^の謂^いを^を尋^{たず}
 ね^ねと^と進^{すす}む^む。田^{でん}村^{むら}磨^らと^とび^びま^まひ^ひ。鬼^{おに}ふ^ふ角^{かく}と^とう^うら^らへ^へ

某れ對面きて尋ねしと俣の中に正市ハ思ひを横手とと
 と打ちこれ正しく某が師の白鶴翁あふんしでく某にて糸
 らんと御前をまゝ外面に出しハ白鶴翁をうらみつく。あふ跡
 の對面よ別とて後にも恙なきや。御前の安否いさふんと都
 の便を笑ふに。うは痛ありけり。明君不仕とて今と
 昔の御辺はあふびと。いと敬讓の翁が言ふ正市ハ父母不達也
 ごとくに。飲酒の涙みくらとれが。先と我君の待りてとて人お
 あはさへ取りとて。田村磨の御前不仕件の子細と速る
 に田村磨ハ座をまゝひて翁ハ正座よすめ多人ハ公羽と驚れ
 某とこの阿不住居とて。あはふかひなれ山家の翁君の術
 前不仕とて。あはれあふと。若草駄天の妖術と彼ん

たり御事なると。是なる四海の人れ為なれを明日君不供奉
 たり。彼が妖術を行ふ村ハ某忽ちうち被る人ハ其村御方を
 進めあり君が武勇ヲ誰か敵とけりのおふんと。いとも静か
 解ゆる。智術の奥もいふ斗と。ありハ中されて杉母ハ斯く
 その夜と軍勢の銳氣ハ養ひ。明日不面く勇まらさみ。白
 鶴翁ハ君の後不附とて。煙嵐の巻く押寄く。あふ後
 と向ひの谿川の浅瀬と昨日見置とれば。関正市とて先
 小川を涉りて。鬼が城ヲ寄れとひしく。大木大石ハ掘かく
 とい。塵土を巻く空母を御音ハいふ。乾神も。爰不折人有
 さまなり。去れど小鬼が城ハ韋駄天が。あふ物にや某が昨日
 の手並不凝がれり。いで夫あふ。塵土ハ裂く。とんと鉄槍を。



田村磨

田村磨一箭
照門と対
復讐を
全き



照門

人

小服小かい込石合龍の大門うち開ひて右小霹靂尤も天魔
 鐵權二も引續けて数百の悪鬼の怒を直し。戟の穂先ハ某
 ごとく。射違ふ矢先ハ秋の野ハ久蝨の飛子ことなる。次ハ乱
 軍とかなりり。此ハ頃ハ斗りて韋駄天を件ハ呪文を唱ふる
 ぞ。忽一天黒雲覆ひ。電光宇宙ハ光々々。傾響くく。雷
 鳴渡つ。今や天地も崩んと。是れ間もあせせ。降ふる鉄
 火田村の軍ハ落れ。れハ總軍ハ失ふ。と。此ハそのと。此
 白鷲翁劍を抜く。天ハ向つ。呪文を唱へ。前後左右ハうち
 拂ふ。今も。烈き霹靂。稲妻黒雲須臾ハ消果く。鉄火
 と。之ハ枯穂の浮空を。忽蒼々と。日輪光輝爛々。是
 是を。之ハ。白鷲翁ハ。す。打勝。り。回。く。と。此ハ。其ハ。

田村管。採幣取。くら。振。く。此圖を。外。ま。り。の。ど。も。よ。か。れ
 かれ。と。流。下。知。ふ。官軍。ハ。下。か。の。猶。豫。し。て。た。討。も。切。り。も。厭
 り。こ。そ。お。め。た。叫。ん。ど。轟。直。ふ。り。伏。せ。難。伏。せ。突。入。り。あ。せ。し
 り。の。魔。軍。も。な。ま。り。か。ひ。ど。流。く。と。石。合。龍。を。は。じ。て。立。所。次。
 韋駄天。焦。燥。く。身。ハ。振。り。鬼。も。云。れ。味。方。の。兵。ハ。未。練
 の。働。ハ。憑。心。や。せ。そ。この。韋駄天。ハ。死。り。の。狂。ハ。天地。を。劈。力。ハ。看
 と。鉄。棒。ハ。手。に。水。車。大。喝。一。声。ア。う。く。と。ア。と。投。け。く。と。こ。
 押。小。打。と。く。七。八。人。同。ハ。は。ら。ら。伏。ら。し。豫。め。の。ご。お。傷
 の。松。の。樹。こ。う。く。と。引。抜。く。獅子。奮。迅。の。怒。を。直。し。四。方。ハ。方
 難。く。れ。眼。ハ。鏡。ハ。血。ハ。濺。れ。荒。ふ。あ。せ。と。勢。ハ。勝。誇。り。官。軍
 も。盛。入。り。て。と。ら。く。と。人。間。業。あ。ら。よ。も。非。と。白。と。波。つ。て。見。

石村物語卷之五下

ちれとら落し。不思儀や御方の旗れ上ふ千手観音の光り放
 放つて虚空に飛行し。子の御も毎ふ大悲の弓ゆを智慧の
 矢次をめて一度におせ。千の矢先雨霞と降りつ。魔軍の
 うへおれと落し。大悲の弓れ外矢なり。魔軍の残らむ討と
 み々れ。韋駄天教う所ふ矢次帯ながら。狩も豪氣と百倍て
 血ふ流る。大の矢次ひろげ。田村を目標け。飛かむ。大悲の光お
 眼も晦。狂ひ回れを正市の得。うりと。向拜討。肝腕は
 と切落せ。透も。田村磨つ。け入れ。髪。韋駄天。か
 手に。掘ん。く。迷途の旅。よ。行人と。捨。あ。と。死
 田村磨。手練の手。内。ら。ぞん。乳。の下。け。切。け。り
 じ。の。韋駄天。より。得。ぞ。叫。と。む。かり。よ。仰。さ。ま。小。倒。る。所。死

乗か。怨の及。かり。知。と。と。の。刀。咽。ぬ。貫。れ。と。ま。ま。
 そ。公。地。に。関。正。市。の。勇。力。お。し。と。み。君。の。恵。み。今。そ。し。ま。幸。望。遂。
 ら。れ。し。よ。と。韋。駄。天。が。首。打。落。し。お。ど。の。髪。か。ひ。掘。ん。と。目。
 より。も。高。く。指。あ。ぐ。れ。の。惣。軍。一。度。も。寄。り。て。凱。哥。の。声。山。谷。を。
 動。し。け。れ。ぞ。勇。に。し。ま。れ。是。ぞ。却。て。人。の。大。慈。大。悲。の。観。音。擁。護。
 の。佛。力。なり。と。田。村。磨。ハ。伏。拜。す。懽。悦。の。眉。目。開。れ。に。正。市。も。
 同。し。ら。の。花。を。降。大。悲。の。徳。を。仰。ご。と。誠。なる。かな。天。
 網。疎。れ。れ。も。終。小。漏。ら。ず。岩。岸。刑。部。太。郎。弓。木。甲。斐。守。その。外。
 大。伴。貞。純。大。伴。高。貫。を。始。と。して。魔。軍。一。人。も。残。さ。む。亡。び。し。と。
 子。手。親。世。音。比。佛。力。と。し。ひ。田。村。磨。の。武。徳。の。至。る。と。と。落。ふ。
 去。く。古。往。今。來。從。之。累。の。童。子。も。知。さ。る。と。と。落。な。り。去。り。に。

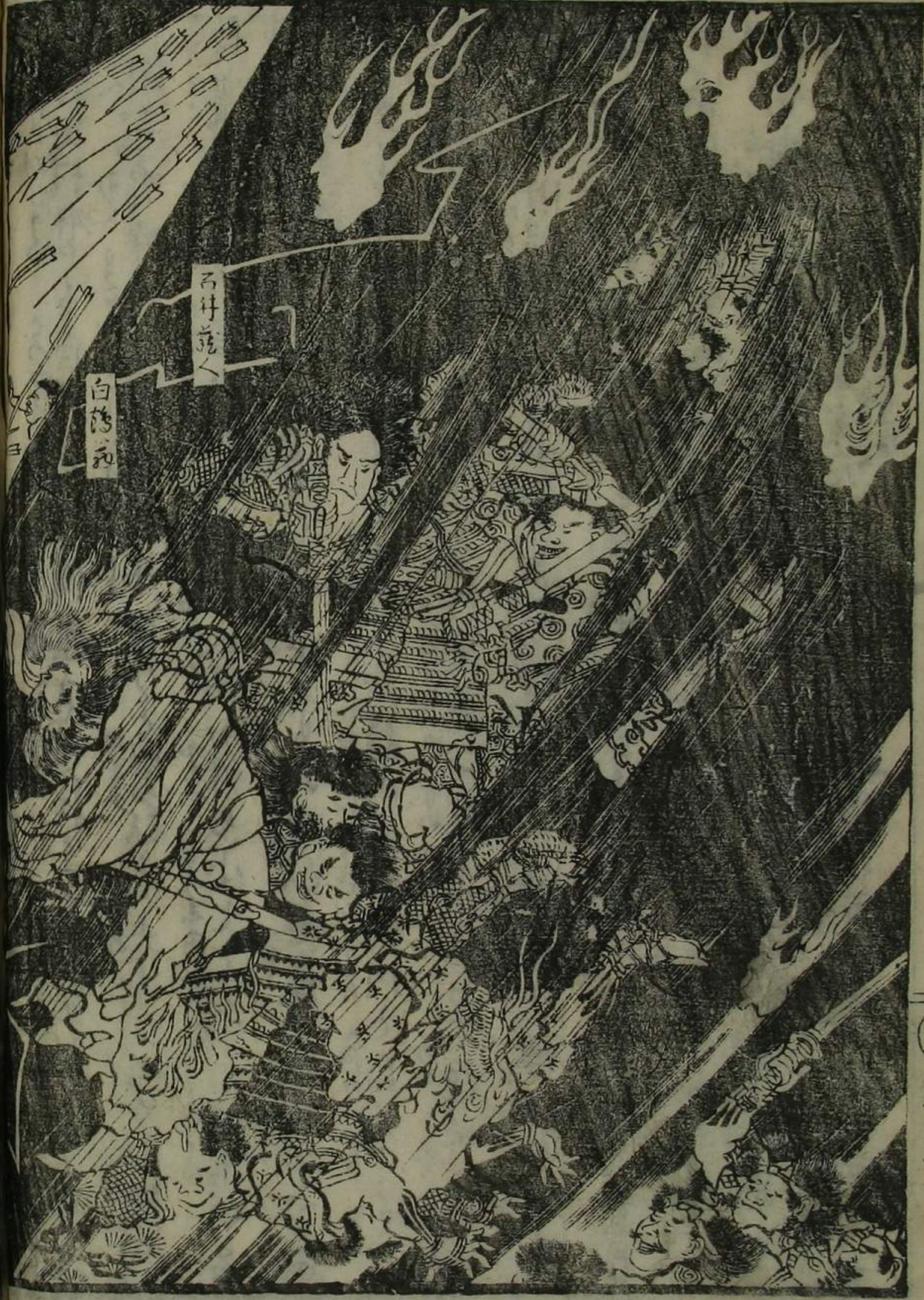
田村磨を軍次引纏て都に上りて登りたるや。白鶴翁のこも
 ろり暇を告ぐ山荘ふゆいとせし。田村磨宜く然りて老翁
 をも俱ふ都に伴ひて。且暮教誨を示し。多くとあり。小鶴翁堅く
 固辞て。某の山家の翁人間。小望なく山荘の日月。老を養ひ
 こそ元より願ふところなれど。魔軍の妖術廣大なりと。笑ふ足次
 破らざるの四海の民安穩なりと。左ねづ。こゝろ忍びて。爰ふ
 ありて妖術。おとす。幸君の武徳。ゆつと。速に鬼神。死に
 たまふ。何ぞ世お望み。種々此賜。送り。鬼神。御
 志。謝し。更ふ。又正市。御
 忠。日頃。事。疎。捨袖。携
 て。然として。去。正市。深。鉄

別々田村磨を巨勢翁の後蔭えゆれ。打望。ひ。嘆息
 小耐。嗚呼。誠。是。隱君子。宣。夫。橋
 打渡。土山の宿中。此夜。人馬。休。小七。酒。名
 酒。小鉄。國。汲。將卒。悦。盡。た。この
 酒。味。美。なり。宣。後。人。田村。命。今。正
 て。此所。名酒。又。遥。星。霜。後。此。驛。東
 小將軍。田村磨。を。神。祭。り。て。田村。神。と。仰。奉。了。神。社。を。造。ら。し。め。り。
 驛。中。東。の。方。の。生。土。神。と。な。し。崇。敬。せ。り。例。祭。も。正。月
 十八日。なり。神。室。あり。田村。將軍。の。画。像。あり。左。右。二。鬼。を。從。へ。又
 鈴鹿。御。前。の。画。像。俱。に。彩色。み。其。表。装。美。なり。鯉。老。人。竊。お。掛
 二。鬼。ハ。韋。駄。天。毒。丸。を。か。た。た。る。物。あり。是。ハ。叔。お。と。田村。磨。ハ。鶏。鳴。三。つ。つ
 鈴鹿。御。前。の。疑。あり。月。雪。姫。と。名。取。物。



日本外傳卷之五

十一



日本外傳卷之五

十二

と洛土山の驛をまゝ道に急がせり。既而都に到着あり。事の次第に審に敷聞み達し。あふ。天皇の御威少なり。速小妖鬼を平げり。悦び。辨官たりて。多く金帛。恩賞。はく。ばり。是公卿を。月卿。客も。その。武。を賞せり。田村。を。君。謝し。奉り。館。あり。上下の悦び。擧ぐ。云。非。韋。毒丸。始。負。純。高。貫。の。首。を。考。の。尊。素。懐。遂。今。知。白。鶴。翁。が。

川田再生

田為村繁榮

とい。し。田。死。再。生。事。田。繁。榮。と。い。意。隱。言。是。父。人。

その明なれを感し。あへ。田村。月。雪。姫。の。よ。千。手。觀。世。音。謁。仰。是。正。市。進。し。と。彼。命。大。伽。藍。建。立。な。り。佐。木。民。部。を。はじめ。石。井。藏。人。関。正。市。等。の。ご。と。忠。あ。り。其。切。算。て。高。禄。を。た。す。或。ハ。金。帛。に。賞。わ。り。て。後。正。市。が。父。正。右。衛。門。正。次。と。す。都。亦。召。登。せ。り。且。世。代。他。が。娘。小。菊。を。その。生。と。美。し。而。已。な。り。こ。正。と。す。彼。家。元。より。武。士。の。筋。目。と。い。ひ。正。右。衛。門。所。縁。あ。れ。ば。ひ。と。も。取。べ。き。あ。ふ。正。市。が。妻。と。す。世。代。作。も。亦。信。義。武。士。の。筋。目。と。い。ひ。空。く。民間。不。埋。れ。ん。更。ふ。な。げ。く。事。り。直。不。是。以。舉。用。ひ。て。

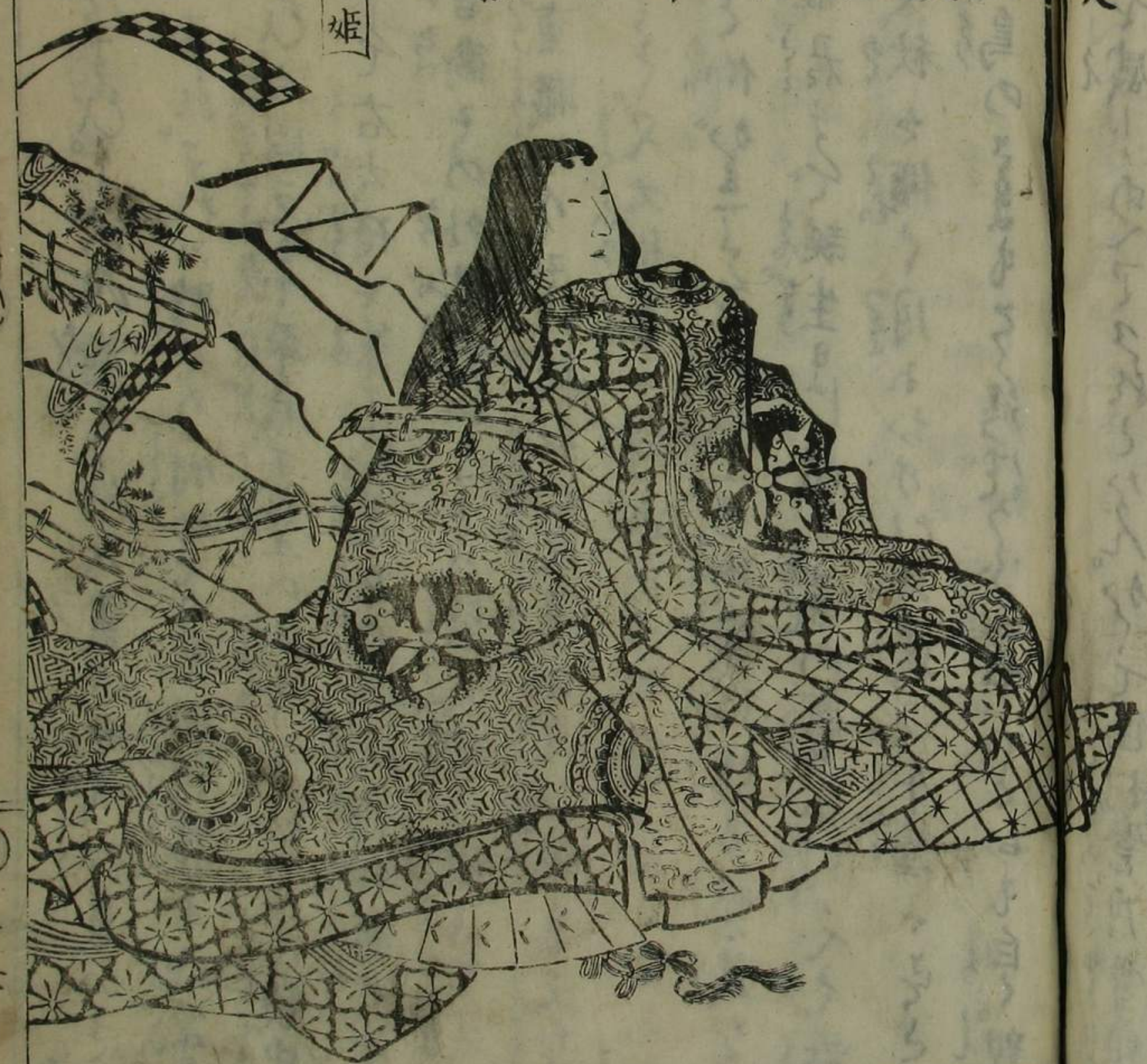
田村磨



人之命乎人
也以吉凶禍
福貴賤壽夭

人所稟之數
厚薄不齊或
相倍蓰或相
什佰或相千
萬天之降命
爾殊者非有
意為之偶然
而已矣

月雪姬



武士と稱したまひ。よ海河海を流るる盡させ。御仁急いと浅
かゞばそ聞へまされ。されば時より耐ゆるて田村磨と次第に
昇進さす。大同元年平城天皇の御宇に移りて後中納
言田村磨及び右大將を兼し。是左右の大將相並む。免
なり。禁中警衛その外武官のこころ。皆大將の掬めて大臣
に相對する重職なり。その後弘仁元年不及。嵯峨天皇の
御宇に當りて。又大納言に昇進ありて。代りて天皇お仕へ
天朝の忠臣と仰がま。坂上の御家孫坊に繁茂なし。
月雪姫と稚君とて誕生まはし。昔の憂ふく。春ハ
曙の櫻小愛秋々傾く月おかりひに遣り。千種みまごく
虫の音。空飛鳥のさまもころほげうらみや。いとおも白く。親戚

常に會合さす。以産の御母種継御白葉が厚くいとさる。萬
樂さす。されば奉りもな。ころほのゆに歲月次流りたまひ。
伊夫婦の法中流かゞに君明小民さす。萬々歳とぞ栄へ
るまひさされとらん。

田村物語卷之五 下卷



編述

天風材龜翁

出像

蹄齋小馬

備書

石原駒知道

剗刷

朝倉權八

孝子嫩物語

全部五卷

去辰五月賣出し道中長
姉身千辛万苦し報雙
全し志し面白しし
伊求侍候了り

小説繪本目錄

繪本新説二熊傳

北條明斷錄

全六冊

唐太宗軍談

全二十冊

同

二編

全六冊

繪本顯勇錄

全十冊

宋史軍談

全二十冊

同

三編

全六冊

同田村物語

全六冊

前太平記

全二十冊

同

四篇近刻

全六冊

同報仇雨夜傘

全十冊

同圖繪

全六冊

同

西遊全傳

全十冊

同龜山話

全十冊

前々太平記

全二十冊

同

二篇

全十冊

同合邦過

全十冊

繪本扶桑皇統記

全六冊

同

三篇

全十冊

同鎌倉年代圖繪

全十冊

同後篇

全七冊

同

四篇

全十冊

同鎌倉年代圖繪

全十冊

吳越軍談

全十八冊

同

稻妻表紙

全八冊

同金刀比羅神靈記

全十冊

繪本吳越軍談

全十冊

同

二編

全十五冊

同彦山權現靈驗記

全十冊

同貳篇

全十冊

同

浪花俠夫傳

全八冊

同伊賀越孝勇傳

全七冊

同三篇

全十冊

同

報仇安達原

全六冊

同忠孝美善錄

全十冊

同四季物語

全

同

朝顏日記

全十冊

盆石四山奇談

全八冊

同妹背山

全六冊

同

年代記

全

金刀比羅名所圖繪

全六冊

同模稜案

全十冊

同

雪鏡談

全十二冊

同

同

萬齋主人編輯 繪本新説二熊傳 自初篇 至三篇 十九冊

該書は文祿元年の頃朝鮮征伐の時其勇將の隨一たる加藤清正の嗣子忠廣に勤仕て寵を得し大鷲熊右衛門と云ふ者真陰流の武道不達し大胆不敵の若漢をり常小酒興不乘し傍若無人の働さ多き故其一國擧て大鷲と惡しむる者ありみよつて或人其項武伎不達しる飯塚善之進と云ふ者を忠廣に薦めて大鷲と較量あさしむ然るふ大鷲負を取り遂不其遺恨を以て善之進を暗殺す故不善之進の嫡子且荒川熊蔵と云ふ者等と相謀り讐の大鷲を探索せしむつと種々艱難不慮の災不逢ふとと數回と雖も神の冥助を得て免れ事杯を著せり而して此奇文婦女子と雖も一たび閱せば一條の一條より面白く説解るゆゑ次々見まく思ひ玉ふるり尚求めて鄙言の虚あらざれば我知りたす

各邦書籍發兌

浪華

三水佐助梓

心齋鐵橋筋北久寶寺町通角

